

## 博士学位論文概要

### 改革と革命と反革命のアンダルシア／「アフリカ風の憎しみ」、または大土地所有制下の階級闘争（1868 - 1939年）

渡辺雅哉

はじめに

1929年に出版された『アンダルシアの農民騒擾史／コルドバ県（農地改革の背景）』（以下、『騒擾史』）のなかで、フアン・ディアス・デル・モラルは1903年にコルドバ県を実質的に初めて襲った騒擾を優れてリベルテールの現象と見なし、特異な熱狂を伴ったその発現を「イマジネーションに富みながらも無教養な」アンダルシア人氣質と「宗教的・ユートピア的な」アナキズムとの結合の所産と考えた。しかし、「ボリシェヴィキの3年間（1918 - 20年）」までの、たかだか20年にも満たないときの流れのなかで、「優れてリベルテールのな」反逆の形態は大衆的な支持基盤の裾野を広げ、アナキズムからゼネラル・ストライキを主武器とするアナルコサンディカリズムへと変貌を遂げる。『騒擾史』が描いてみせたものは、「散文的な」サンディカリズムの浸透により、当初のアナキズムの「宗教的・ユートピア的な」性質が薄められていった過程でもあった。他方で、現代スペイン最大の社会的病巣としての「アンダルシアの農業問題」が顕在化した19世紀の中葉以降、一貫して変わらなかったのが、日雇い農たちが示したラティフンディオ（大土地）の再分配への、ディアス・デル・モラル当人の命名に従えば「土着の社会主義」の成就への期待に胸を焦がすありさまである。

『騒擾史』の著者に捧げられた「社会史の先駆者」との讃辞をよそに、1975年のフランシスコ・フランコ将軍の死去とともに本格化したアンダルシアの現代史の研究はその主張をもっぱら論駁する方向でなされてきた。そこでは、共和派や社会党の活動が重視されるとともに、組織化された日雇い農たちの反逆の作法の「合理的な」あり方が強調されている。事実、「ボリシェヴィキの3年間」には、「宗教的・ユートピア的な」理念を信奉する古参の「純粋」アナキスト、ホセ・サンチェス・ロサがアナルコサンディカリスト労組CNT（全国労働連合）を除名される。また、第2共和制期のコルドバ県では、農業ストライキの指導力の点で、社会党系労組UGT（労働者総同盟）がCNTを凌駕するまでになる。

それでも、「純粋」アナキズムの根が絶えてしまうことはない。それは、ミゲル・プリモ・デ・リベラ将軍の独裁期の1927年に密かに発足したFAI（イベリア・アナキスト連盟）に再生のための足掛かりを見出す。「革命信仰」に帰依し、「聖者」フェルミン・サルボチェアに受肉された19世紀の「革命文化」を継承する「純粋」アナキストたちが集うFAIは、第2共和制期を迎えてCNT

のヘゲモニーを掌握、「組合から」CNT傘下の労働力を鼓舞する戦略に訴える。さらに、FAI派の主導のもとにとみに左傾したCNTは、第2共和制の破壊とリベルテール共産主義体制の建設を目指して各地に武装蜂起を決行した。1933年1月、この「反乱のサイクル」にカサス・ビエハスのCNTが合流。治安維持装置の過剰な応戦により多量の血が流されたため、アンダルシアの名もない集落での反乱は第2共和制の行方をも大きく左右する結果を招く。だが、「ポリシェヴィキの3年間」に定着したかに見える「合理的な」組合活動とは一線を画す南スペインのFAI派の動向は、大方の現代史家たちの関心の外にある。そこで、本稿の最大の狙いは、第1インターナショナルのFRE（スペイン地方連盟）以来の「純粹」アナキズムの水脈にも着目しつつ、「アフリカ風の憎しみ」とも形容される、この地方の労使を分かち階級憎悪が1930年代前半を通じてさらに深化し、ついには内戦（1936 - 39年）の破局へと雪崩れ込む過程を描くことにある。

農地改革が日程に上った第2共和制期にあつて、「最も精力的な」農相との評価も与えられているのが、CEDA（スペイン独立右翼連盟）のマヌエル・ヒメーネス・フェルナンデスである。しかし、「暗黒の2年間（1934 - 35年）」のさなかに農相に抜擢されたこの人物の精神は、政教分離が推進された第2共和制の「改革の2年間（1931 - 33年）」の反教権主義に対立する要素を孕んでいた。所属政党からも窺われるとおり、紛れもない「右翼」でありながらも農地改革に尽力する「最も精力的な」農相は、農業エリートや党内の同僚たちから反発を買う。ヒメーネス・フェルナンデスの立ち位置を見定めることと併せて、フランコ派初のコルドバ市長に就任するサルバドール・ムニョス・ペレスら、アンダルシアの有力な農業経営者たちが1936年7月の反革命的な軍事行動に加担していった経緯を明らかにすること。これも本稿の大きな課題である。

『騒擾史』の副題が物語るように、ディアス・デル・モラル自身も農地改革に関心を寄せていた。『騒擾史』の著者が「アンダルシアの農業問題」解決のために用意した処方箋の中身と、「改革の2年間」にそれが意味したもの。復古王政の時代を通じて、他でもない南スペインでカシキスモ（ボス支配）が猖獗を極めるなかでの、共和派とリベルテールたちとの関わり。あるいは、内戦期にまで持ち越された、「純粹」アナキズムとサンディカリズムとの相克。本稿では、やはりこれまで充分には検討されてこなかったこれらの問題にも照明を当てる。

## 第1章：砂上の楼閣？／マヌエル・アサーニャとスペイン第2共和制の崩壊

『騒擾史』は、実質的に「ポリシェヴィキの3年間」の終焉とともに閉じら

れる。そこで、議論の前提として1930年代のスペインのあらましを知っておくことが必要である。本章では、「カサス・ビエハスでは起こるべきことが起こった」（第1節）その他、第2共和制の陸相・首相・大統領を歴任したマヌエル・アサーニャ・ディアスの口から、いずれも1930年代に発せられたいくつもの「言葉」を導きの糸に、1931年4月、ブルジョワ出の知識人の共和派と社会党・UGTとが手を携えて出帆した第2共和制が崩壊を余儀なくされた過程をたどる。1936年7月に軍事クーデタが勃発するまでの5年間は「改革の2年間」と、急進党・CEDAがそれまでの改革路線に歯止めをかけた、左翼にとっての「暗黒の2年間」、それに36年2月に幕を開ける、一面では「改革の2年間」への回帰とも見なされうる人民戦線期に3分されるのが一般的である。

概して政治に疎い「インテリゲンツィヤ」にとっては「言葉」に託された「理性」のみが、スペインを刷新するためのほとんど唯一の拠りどころである。そして、アサーニャこそは正しくその典型だった。アサーニャの「理性」と「言葉」は、祖国の刷新を頑強に拒む「現実」に直面し、しばしば立ち往生を強いられる。アサーニャがその実現に向けて特に熱意を見せた政教分離と軍制改革は、もちろん教会と軍部の反発を惹起せずにはおかない（第2節）。逆に、カタルーニャの地域ナショナリズムは、彼の地への自治権の付与に積極的だったアサーニャの思惑を超えて「暴走」する（第4節）。そのアサーニャは、少なくとも当初の段階では農地改革にまったく関心を示さなかった。「アンダルシアの農業問題」は、「骨の髄まで」ブルジョワだったアサーニャには鬼門だった。それでも、1932年8月のホセ・サンフルホ将軍のクーデタ騒動をきっかけに、アサーニャは水泡に帰したこのクーデタとの関連を疑われた旧領主貴族の土地の没収を俄かに提唱。おかげで、翌月に国会を通過する農地改革法には「膨大な数の農民大衆」の救済という本来の趣旨を逸脱した政治的な負荷が加わった（第3節）。

## 第2章：アンダルシア／「ヨーロッパで最も不幸な人々」の末裔たちがのたうつ土地

アンダルシアの大土地所有制は、19世紀の前半から中葉にかけて実施された自由主義的農地改革により一応の確立を見る。この章の第1節では、特にデサモルティサシオン（教会・自治体所有地の売却）の実態を検証。スペインでは1880年代以降に顕在化した、新世界産の安価な穀物類の大量流入に起因する「世紀末の農業危機」を経て、グアダルキビール川の中下流域の土地所有構造はさらに分極化される。この「危機」がアンダルシアにもたらしたものは、農業ブルジョワジーとともに自由主義的農地改革の受益者であった旧領主貴族の没落と、日雇い農の激増である。第2節では、「危機」の諸相を追いながら、併せて

農業エリートの中に生じた、第 2 共和制の農地改革をめぐる議論にも影響することになるバランスの変化に着目する。18 世紀半ばの、ある著名な啓蒙主義者が同情を禁じえなかった「ヨーロッパで最も不幸な人々」の末裔たち、つまり南スペインの農業プロレタリアートの惨状を明らかにするのが第 3 節である。

### 第 3 章：リベルテールたちのアンダルシア／「マノ・ネグラ」騒動から「ポリシェヴィキの 3 年間」まで

「世紀末の農業危機」の初期段階の 1882 年暮れ、ヘレス・デ・ラ・フロンテラ界隈で持ち上がった「マノ・ネグラ」騒動と、その 10 年後にこれもヘレスを見舞った騒擾の後には、いずれも日雇い農たちに対する徹底的な弾圧が待ち受けていた。弾圧を乗り越え、南スペインにリベルテール的な反逆の精神が蘇るのは 20 世紀の初頭のこと。そして、実質的にこのとき初めて反乱に身を投じたのが、コルドバ県の日雇い農たちだった。「危機」の最終局面で生じるポリシェヴィキの 3 年間に、農業ストライキ攻勢の主演を演じるのも彼らである。

本章の第 1 節では、1880 年代から 20 世紀初頭にかけてのアンダルシアの階級対立を瞥見する。第 2 節では、主として現地取材に基づく IRS（社会改革機構）の『コルドバ県の農業問題に関する報告』（以下、『IRS 報告』〔1919 年〕）によりながら、コルドバ県の「ポリシェヴィキの 3 年間」の労使紛争の総じて「散文的な」中身を問う（労使間の「アフリカ風の憎しみ」を憂慮するある農業経営者の声も、この『IRS 報告』に収録されている）。第 3 節では、「世紀末の農業危機」が深まるなかで提起された農地改革をめぐる議論の方向性を探る。ローマ教皇レオ 13 世の社会カトリシズムに端を発するそれは、要するに体制維持のための手立ての域を出ない。「土地」を自らの存在根拠とし、日雇い農たちとの連帯を謳うアンダルシアの地域ナショナリズムが階級対立の激化を追い風に尖鋭化するとともに、その限界を露呈したのもやはり「3 年間」においてである。

### 第 4 章：「純粹」アナキズムの系譜／サルボチェア、サンチェス・ロサ、そして「コルドニエフ」

本章の第 1 節では、『IRS 報告』に綴られたサンディカリストたちの証言とは大きく隔たった、「コルドニエフ」ことサルバドール・コルドンらのそれに着目しながら、ポリシェヴィキの「神話」と呼ばれるものを検討する。「神話」を云々する主張には、アナルコサンディカリズムが定着を見た「ポリシェヴィキの 3 年間」には確かに守勢に回った「純粹」アナキズムへの視座が欠落している。第 2 節では、「3 年間」に CNT を追われたサンチェス・ロサや、その師サルボチェアの言動のうちに集約された、FRE・FTRE 以来のアンダルシアの「純粹」

アナキズムの浮き沈みに照明を当てる。第 3 節では、既に完全に退けられて久しいかにも見える、アンダルシアの階級闘争についてのエリック・ホブズボームの千年王国主義的解釈を再考する。荒削りながらも、『騒擾史』に多くを依存したホブズボームの問題提起は、「純粹」アナキズムとの関連においてなお無視できない要素を含んでいるように思われる。この節では、「社会史の先駆者」が再現してみせた、やはり「神話」ないしは「伝説」として切り捨てられがちな「土着の社会主義」への日雇い農たちの常軌を逸した執着ぶりにも目を向けてみる。敬して遠ざけられる観の強い『騒擾史』には、新たな読みの可能性が残されている。

### 第 5 章：「帝政ロシアよりも劣悪」？／アンダルシアのカシキスモ、共和派とリベルテール

アンダルシアへのリベルテール的な理念の浸透は、反体制派の政権獲得の可能性をあらかじめ排除するカシキスモの根づきと表裏一体の関係にあった。この章の第 1 節では、復古王政期のコルドバ県での地方選挙や総選挙を材料に、普通選挙制の導入にもかかわらず、反体制派の当選が阻止され続けたメカニズムを解明するとともに、カシキスモに立脚した「平和裡の政権交代」のシステムを復古王政に導入したアントニオ・カノバス・デル・カスティーリョの政治思想についても考察する。第 2 節では、復古王政の打倒をもくろむ共和派が抱えていた脆弱さにメスを入れる。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのカルモーナで観察されたように、共和派とリベルテールたちが地元の労働力の間でのヘゲモニーを競い合ったこともある。しかし、共和主義を看板に掲げるアレハンドロ・レルーやマヌエル・モレノ・メンドーサは、仕舞いにはカシキスモに絡め取られてしまう。その一方で、「反政治」や「非政治」が信条のリベルテールたちにしても、「政治」と完全に無縁というわけではなかった。ペドロ・ロペス・カーリエら自治体の首長になった活動家もいたし、CNT の一般の組織員たちも投票を一貫して拒んだわけではなかった。第 3 節で明らかにされるとおり、国家と教会とが癒着した復古王政のもとでは、反教権主義を 1 つの梃子としてリベルテールと共和派、さらには宗教的寛容と博愛を旨とするフリーメーソンが歩み寄る可能性が存在した。「政治」と絶縁したはずのサルボチェアも、レルーやビセンテ・ブラスコ・イバーニェスら共和派が発行していた新聞に寄稿する。

### 第 6 章：カストロ・デル・リオとブハランセ／FAI 派と第 2 共和制期コルドバ県の階級闘争

本章では、FAI の「純粹」アナキズムの信奉者たちの動静をも加味したうえで、第 2 共和制期のコルドバ県のいくつかの側面を照射する。第 1 節では、「改

革の2年間」に組織力・動員力の点で社会党・UGTがCNTを凌駕するに至るまでの過程を跡づける。社会党・UGTが躍進を遂げるきっかけの1つは、1930年のUGT傘下の農業労働者組織FNTT(全国土地労働者連盟)の設立にあった。「インテリゲンツィヤ」との共闘を選択した社会党・UGT(FNTT)は、当初は農業ストライキの実施を自制する。しかし、「相方」との階級的な隔たりが知覚されるなか、1933年6月、コルドバ県のFNTTは農業ストの指導権をCNTから奪い取った。第2節では、「暗黒の2年間」の到来を待つまでもなく観察された1930年代前半のコルドバ県の政治の閉塞状況を詳らかにする。「改革の2年間」に労働運動の弾圧に辣腕を振るったエドゥアルド・バレーラ・バルベルデの県知事への任命は、政権を担う知識人たちの眼識の曇りを端的に物語る。1933年11月の総選挙を前に大地主たちが反転攻勢に転じるなか、CNTに対して優位を占めたはずの社会党・UGT(FNTT)も苦境に立たされる。第3節ではCNTが後退を強いられるなかで、県内各地にFAIの橋頭堡が構築される過程を追う。FAI派が「組合から」影響力を行使したおかげで、カストロ・デル・リオとブハランセの日雇い農たちはバレーラ・バルベルデが例外的な、と形容する他なかったほどの戦闘能力を発揮した。第4節は、カストロとブハランセを舞台にした労使紛争の実態の検討に当てられる。第5節では、『騒擾史』の著者の故郷でもあるブハランセを襲った、そしてその敗北により結果的には県内のCNTのいっそうの弱体化を招いた1933年12月の武装蜂起のありさまが再現される。

## 第7章：第2共和制農地改革の限界／ディアス・デル・モラルと「アンダルシアの農業問題」

『騒擾史』は、1876年に自由教育学院を創設したフランシスコ・ヒネール・デ・ロス・リーオスらの思い出に捧げられた。「改革の2年間」に代議士の資格を得た知識人たちの多くは、復古王政期の反体制派の知的砦だったこの学院に何らかの形で結びついている。コルドバ県選出の憲法制定議会代議士ディアス・デル・モラルも、「知識人の共和制」(アソリン)の本流に連なる人材だった。同時に、農地改革のための国会委員会代表を務める『騒擾史』の著者は、ANO(全国オリーブ栽培業者協会)の書記長の肩書きを持つ農業経営者でもあった。

本章の第1節では、そのディアス・デル・モラルの手になる農地改革のための「私案」を俎上に載せる。この「私案」では「直接経営」の利点を強調する立場から「ブルジョワ的な」大土地所有の維持が図られる一方で、借地経営が主流の旧領主貴族の土地が収用の対象に選ばれる。改革の恩恵に最もよく与るのは、南スペインの労働力の大半を占める日雇い農ではなく借地農である。

「私案」は、社会党代議士にして FNTT 全国委員会書記長のルシオ・マルティネス・ヒルらからの激しい批判に晒される。それは、「改革の 2 年間」を牽引する「インテリゲンツィヤ」と社会党・UGT (FNTT) との「階級的な」隔たりが浮き彫りにされたひとときだった。第 2 節では、「私案」に明らかなディアス・デル・モラルの「持てる者」としての性癖を『騒擾史』からも炙り出す。『騒擾史』のなかで、ディアス・デル・モラルは土地所有の集中の度合いと騒擾の頻度との間に直接の関係を認めようとしなない。また、「ポリシェヴィキの 3 年間」のアナルコサンディカリズムの敗北の原因も、「あらゆる社会的な営みに不可欠な、強靱で持続的な努力のできない大衆の無自覚・無教養」に帰せられる。社会党・UGT (FNTT) は彼らブルジョワ出の知識人との関係を絶って、1933 年 11 月の総選挙に挑んだものの大敗を喫した。1934 年 5 月に FNTT が実施した、「ポリシェヴィキの 3 年間」を上回る大規模な農業ストライキ攻勢も「暗黒の 2 年間」に跳ね返される。コルドバ県を材料に、この流れを検証したのが第 3 節である。

## 第 8 章：社会カトリシズムの敗北／サルバドール・ムニョス・ペレスとアンダルシアの反革命

反教権主義的な「改革の 2 年間」に代わった「暗黒の 2 年間」に、農地改革の原点、つまり社会カトリシズムの精神への回帰をもくろんだのが、CEDA のヒメーネス・フェルナンデスだった。第 1 節では、パルマ・デル・リオの大地主フェーリクス・モレノ・アルダヌイに焦点を当てる。その言動には、農地改革に関する議論には一切耳を貸そうとしなかった南スペインの農業エリートの方の姿勢が図らずも凝縮されていたかに思われる。第 2 節では、1934 年 10 月から翌年 5 月までの間の、ヒメーネス・フェルナンデスの農相としての営為を検証する。CEDA の農相は、自身が出馬した、大土地所有の重圧の点ではアンダルシアに匹敵するエストレマドゥーラの借地農たちの救済にひとまずは着手する。しかし、農業エリートとその利害を代弁する CEDA の同僚らの反対により、この「白いポリシェヴィキ」の企図は道半ばにして挫折する。孤立する「ポリシェヴィキ」は政治色の濃い先の農地改革法とは異なった立場から自身が練り上げた、新たな改革法案の国会提出をも断念せざるをえない。第 3 節では、1936 年 2 月の総選挙での人民戦線の勝利をきっかけに農地改革への期待が再燃するなか、ムニョス・ペレスらが第 2 共和制打倒の策謀に関与していった流れを詳らかにする。第 4 節では、復古王政の初期から第 2 共和制期にかけて、アンダルシアの農業エリートが日雇い農たちの組織化の進展に反比例する形でその精神をいよいよ硬直化させていったありさまを、大掴みにではあれどつてみる。

## 第9章：ヘレスからバーサへ／アンダルシアのFAI派と「アンチ・サルボチェア」たち

本章では、20世紀の初頭から内戦が終わるまでの間の、アンダルシアにおける「純粋」アナキストとサンディカリストの対立・抗争を包括的に展望する。第1節では、第2共和制期にコルドバ県を主な活動拠点としたアルフォンソ・ニエベス・ヌーニェスの「純粋」アナキズムを俎上に載せる。ニエベスは、FAI主導の「アナーキー」＝人類の再生をCNT／組合主導のリベルテール共産主義＝経済的な解放の上位に位置づけることにより、「散文的な」サンディカリズムを超える「純粋」アナキズムの論理を提示する。だが、ニエベス自身が「経済的な解放」の見本とした1933年1月のラ・リンコナーダでのリベルテール共産主義体制構築の試みは、現実にはカサス・ビエハスやブハランセでのそれと同様、治安維持装置の投入にあってなすすべもなく頓挫していた。1936年の夏、カストロその他、軍事クーデタが奏功しなかった空間でのリベルテール共産主義社会の刹那的な現出は、フランコ派の決起に伴う第2共和制の統治能力の麻痺に「純粋」アナキズムが乗じた結果だった。第2節では、ヘレスのセバステイアン・オリーバ・ヒメーネスのイニシアティヴによるFNC（全国農民連盟）創設の企てや、モロン・デ・ラ・フロンテーラのアントニオ・ロサード・ロペス肝煎りのアンダルシアFRC（地方農民連盟）創設の企てが、軍事クーデタの勃発を待つまでもなく破綻した理由を考える。第3節では、内戦中に東アンダルシア各地を舞台に断行された、ロサードらのイニシアティヴに基づく農業集団化のもようを瞥見する。集団農場の建設そのものは、内戦が惹起した経済的な混乱を收拾するために編み出された偶発的な営みだった。だが、組合を集団化の基軸に据える発想は、オリーバらが早くから提唱していた、組合を社会革命のための土台と見なす、「純粋」アナキズムとは異質の戦略に通じている。第4節では、カストロのFAI派バルトロメ・モンティエーリャ・ルスの1930年代を通じての言動を解析する。1936年9月の自身の故郷の陥落を境に東アンダルシアへ逃れた後、モンティエーリャ・ルスからは「革命信仰」を思わせるそれまでの「純粋」アナキストらしい言説が聞かれなくなる。リベルテール共産主義体制の構築をひとまずは棚上げにしたうえで、集団農場の建設に従事するカストロの元(?)FAI派の姿勢は、FAIの「純粋」アナキズムを嫌うロサードのそれにほとんど完全に合致していた。元来CNTの組織基盤が脆弱だった東部戦線にあつて、第2共和制の国家権力が不完全ながらも修復に向かうなか、「革命文化」は意味を失う。モンティエーリャ・ルスの態度の変化は、FAIの「革命信仰」の消滅を象徴していた。



## むすびに代えて

第1章から第9章までの内容の概略を述べたうえで、第1節では南スペインでの内戦中とフランコ独裁初期の「アカども」への弾圧の実態を、県あるいは市町村レベルで分析する。コルドバ県の場合、内戦後の犠牲者数ではコルドバを除けばカストロが突出していた。「ジェノサイド」の生贄のなかには、大土地所有制への抗議行動に身を捧げた数多くの日雇い農が含まれている。また、内戦の敗北を通じて、CNTはほとんど壊滅的な打撃を被った。単にセバスティアン・オリバーら、有力な活動家の多くが殺害されてしまったためだけではない。

「直接行動」の原則を旨とするCNTの存立の根拠そのものが、1950年代に秘密裡に発足し、独裁との対話を厭わないCCOO（労働者委員会）の「新しい組合文化」の台頭により大きく損なわれてしまう。また、カサス・ビエハスの改称に象徴されるように、1930年代の「記憶」も封印された。「兄弟殺し」の悪夢が再現される事態への恐れから、「忘却の契約」の美名のもとに、「記憶」の呼び戻しは1975年にフランコ独裁が消滅してからも忌避され続ける。第2節では、リベルテール的なアンダルシアがその活力をほぼ完全に喪失するまでの流れを跡づける。